

大学の図書館情報学科にみる視点一九九〇～二〇〇〇

ケース…愛知淑徳大学図書館情報学科

・慶応義塾大学図書館・情報学科

・東洋大学図書館学専攻の周辺からみて

橋本典尚

- 一 はじめに
- 二 研究目的と調査分析方法
 - 二・一 先行研究と視点
 - 二・二 対象資料・調査期間と方法
- 三 日本国内の大学における図書館学(学科・専攻) ライブラリアンスクール系譜
 - 三・一 戦前戦後の司書養成・講習・図書館学(学科・専攻) の設置と背景
 - 三・二 図書館職員養成所・国立図書館短期大学・図書館情報大学・筑波大学知識情報・図書館学類の概略
 - 三・三 慶応義塾大学文学部図書館・情報学科の概略
 - 三・四 東洋大学社会学部応用社会学科図書館学専攻の概略
 - 三・五 愛知淑徳大学文学部図書館情報学科の概略
- 四 大学の図書館情報学(学科・専攻) カリキュラム編成
 - 四・一 一九九〇年代の司書課程カリキュラム編成
 - 四・二 一九九〇年代の大学(学部)における図書館学(学科・専攻) 専門領域カリキュラム編成の位置
 - 四・三 一九九〇年代の大学における図書館学(学科・専攻) 専門領域カリキュラム名称の差異と共通性
- 五 むすびに

謝辞

注記

参考文献

一 はじめに

二〇〇八年、図書館法（一九五〇）⁽¹⁾が改正され、国家資格である司書養成の機軸姿勢が、大学講習（司書講習・司書補習）から大学教育（司書課程）に、二〇一二年四月から変わる。背景には、全国的に司書課程を設置している大学・短期大学が、二〇一一年現在、二三七校と、多くなった理由も挙げられる。戦後、占領期にGHQ（SCAP）、CIEからの調査報告と提言から施行された法・省令によって、急がれた司書養成だが、大学に図書館情報課程の設置が少なかった時期、大学における司書講習が中心的な役割を行ってきた経緯からすると、大学における国家資格の位置は、質と共に変化していく可能性を持っている。だが、二〇一一年の現在、専門性から、四年制大学（学部レベル）の学科・専攻として残るのは、国立の筑波大学（二〇一一）知識情報・図書館学類（旧・図書館情報大学）⁽⁷⁾と、私立の慶応義塾大学（二〇一一）人文社会科学図書館・情報学専攻のみである。慶応義塾大学図書館・情報学科（一九五二〜二〇〇〇）と共に、かつて「図書館学の東洋大学」と言われた東洋大学図書館学専攻（一九五九〜二〇〇〇）⁽⁸⁾は、最後まで名称が残っていた愛知淑徳大学図書館情報学科（一九八五〜二〇一〇）⁽¹⁰⁾も改組により消えている。なぜ、四年制大学（学部レベル）での図書館情報学科が少ない状況になったのであろうか。その背景には、一九九〇年代、急速な情報化社会の影響から、国家資格でありながら、専門領域を複合化させ、多角的に改組がすすんだ状況があったからと言える。だが、一九九〇年代、改組が多かった時期を知る資料も、大学における専門カリキュラム編成の軌跡から見られる資料など、現状では、少ない。

では、図書館情報学の専門カリキュラム編成から見えていた視点は、どこにあったのであろうか。先に報告した橋

本典尚(二〇一一)「大学の図書館情報課程一九九〇～二〇〇一^①」では、一九九〇年代、そのひとつのケースとして、東洋大学図書館学専攻と東洋大学短期大学司書課程から、図書館学カリキュラム編成一九九〇～二〇〇〇年の軌跡から報告を行い、情報化するなかでの図書館情報学の視点を見てきた。それでは、一九九〇年代の同じ時期、ほかの大学(学部レベル)で図書館情報学の専門カリキュラム編成は、どのような状況であったのだろうか。

そこで、本論では、先の橋本典尚(二〇一一)^①に続き、図書館情報学を通して、四年制大学(学部レベル)での専門カリキュラム編成から、一九九〇年代の司書教育と専門領域のカリキュラム編成視点について見ると共に、日本国内におけるライブラリアンススクールの軌跡をまとめ記録する必要性を思い、資料調査から整理を行った。

(司書及び司書補の資格) 第五条・左の各号の一に該当する者は、司書となる資格を有する。

一・大学又は高等専門学校を卒業した者で第六条の規定による司書の講習を修了したもの。

二・大学を卒業した者で大学において図書館に関する科目を履修したもの。

(司書及び司書補の講習) 第六条・司書及び司書補の講習は、大学が、文部科学大臣の委嘱を受けて行う。

二・司書及び司書補の講習に関し、履修すべき科目、単位その他必要な事項は、文部科学省令で定める。

ただし、その履修すべき単位数は、一五単位を下ることができない。

① 図書館法(司書及び司書補の養成についての規程)、一九五〇年四月～二〇一二年三月・改正前の条文より

現在、司書養成課程(図書館情報課程)のカリキュラムについては、文部科学省の省令・図書館法施行規則(一九五〇)^③で規程されている。本改正に至る経緯については、二〇〇八年一月一七日に文部科学省で行われた「こ

れからの図書館の在り方検討協力者会議・第二回¹²⁾の資料「図書館に関する科目（改正図書館法第五条第一項第一号）の基本的な考え方」に理由が述べられている。国家資格である司書制度の全体論カリキュラム編成については、文部省（一九六七）の検討委員会¹³⁾がまとめた「司書講習等の改善に関するについて報告」など、長らく関係機関で論議されてきた。だが、本改正まで司書養成は、大学講習を主とする機軸のままであった。

現在、国内で文部科学省から委属を受け、司書講習・司書補講習（図書館学講習）を行っている大学・短期大学は、年によって変わるものの私立大学を中心に、鶴見大学・別府大学・桃山学院大学・九州国際大学・広島文教女子大学など二〇一四校ある。ただ、九州国際大学（二〇一〇）のように長年、行ってきた文部科学省委属司書講習を二〇一一年に取りやめる動きもある。また、北海道エリア、四国エリアでは、司書講習を行っている大学・短期大学はなく、今後、大学教育を機軸にする場合でも、司書資格を取得できる大学・短期大学も全国で平均的に司書課程を設置している状況とは言えない。司書養成の基礎であった講習から大学教育の移行姿勢にあわせ、今後の課題であろう。法改正と省令改正によって、機軸となる大学での司書課程だが、大学の図書館情報学の学科・専攻外では、二〇一一年現在、司書課程を設置している大学が一五六校、短期大学が八一校ある。全体の傾向として、川戸理恵子（二〇〇九）¹⁴⁾によると、文学系と情報学ビジネス系が多い様子だが、領域にとらわれない傾向も指摘している。

本論の目的は、図書館学科として、四年制大学（学部レベル）で設置されていた学科・専攻での専門カリキュラム司書養成から変化するなかで見えていた一視点をみることにある。その例として、一九九〇年代の愛知淑徳大学文学部図書館情報学科、慶応義塾大学文学部図書館・情報学科、東洋大学社会学部応用社会学科図書館学専攻を中心に、専門カリキュラム編成と、司書養成の系譜から視点と、共通性が、どこにあったのかを報告する。

二 研究目的と調査分析方法

二・一 先行研究と視点

先に報告した橋本典尚(二〇一一)「大学の図書館情報課程」『名古屋大学大学文書資料室紀要一九』^①でも述べたが、一九九〇～二〇〇〇年代、高等教育機関の専門領域(国家資格の養成課程)からのカリキュラム編成の軌跡、詳細な資料としての教育活動など、改組などにより、消えた側の資料については、あまり記録されることは少ない。そのため、高等教育の軌跡から早い時期に、資料を再考整理して記録する必要性と役割は、大きいと言える。

では、国家資格のひとつである司書課程(図書館情報課程)の四年制大学における図書館学(学科・専攻)での記録、先行研究の状況は、どのような様子なのであろうか。詳細ではないが、主な、一九九〇年代の四年制大学における図書館情報学(学科・専攻)の専門領域の記録、先行研究として挙げると、いくつか伺える。

東洋大学社会学部図書館学専攻の場合、先に報告した橋本典尚(二〇一一)「大学の図書館情報課程一九九〇～二〇〇〇ケース」東洋大学図書館学専攻と東洋大学短期大学の周辺からみて『名古屋大学大学文書資料室紀要一九』と共に、全体からものに、東洋大学社会学部五〇周年記念委員会(二〇〇九)『東洋大学社会学部五〇年史』^②、数少ない図書館学専攻の記録として、岩淵泰郎(二〇〇二)「応用社会学科図書館学専攻の歴史」『白山図書館学研究』^③、岩淵泰郎(二九九〇)「東洋大学図書館学専攻の新カリキュラムと今後の課題」『白山情報図書館学誌二』、などが挙げられる。

慶応義塾大学図書館・情報学科の場合、慶應義塾大学図書館・情報学科開設五〇年記念行事実行委員会

(二〇〇一)『慶應義塾大学文学部図書館・情報学科五〇年記念誌』と共に、高山正也(一九九九)「図書館学史の発展の中にみる慶応義塾と同志社」『同志社図書館学年報二五』、高山正也(一九九五)「慶応義塾大学文学部図書館・情報学科にみる図書館学教育の変遷と展望」『図書館雑誌八九(六)』など詳細な資料が挙げられる。また、一九七〇年代の慶応義塾大学のカリキュラム編成と検討状況を報告したものに、三田図書館・情報学会に報告されている慶応義塾大学図書館・情報学科カリキュラム委員会(一九七三)「慶応義塾大学図書館・情報学科のカリキュラムの現状」『Library and information science 11』などがあり、他の大学に比べ、時間的な経過も伺いやすい記録資料が多いと言える。

愛知淑徳大学図書館情報学科の場合、全体から大学設立後の記念でまとめた愛知淑徳大学(一九九五)『愛知淑徳大学二〇年誌一九九五』¹⁹⁾、学科設置の初期からの記憶としての、山本進(二〇〇五)「図書館情報学科設立一七周年を振り返って」『愛知淑徳大学論集三〇』²⁰⁾などで伺える。特に、カリキュラム編成の軌跡を報告したものに、愛知淑徳大学図書館情報学科と慶応義塾大学図書館・情報学科に関わった津田良成(一九九三)の「図書館情報学の展開と構築―二つの大学に関わって―」『同志社図書館学年報一九』²¹⁾などが挙げられ、近年の状況を知る手がかりになる資料と言える。

また、図書館情報学の研究・教育の状況について、調査報告をまとめたものに、日本図書館情報学会研究委員会(一九九八)『図書館学研究とその支援体制』研究報告²²⁾などが挙げられ、様子を伺える資料であると言える。

省令改正で図書館法施行規則(一九五〇)²³⁾の内容の変化が大きかった一九九〇～二〇〇〇年代は、パソコンなど情報機器の一般化と共に、旧来からの手書きによる司書技術の方法論が薄くなり、情報機器を利用した司書技術の方法論視点が、技術利用から変化した時期であったことから、一九九〇年代を見る必要性は大きい言えよう。

そこで本論では、一九九〇年代を中心に、改組する少し前の四年制大学・図書館情報学（学科・専攻）での専門領域カリキュラム編成の軌跡から、各大学での司書教育と専門領域の視点について、日本におけるライブラリアンスクールの軌跡と共に、資料をまとめ報告することを目的とする。

二・二 対象資料・調査期間と方法

四年制大学（学部レベル）での図書館情報学（学科・専攻）専門カリキュラム編成の比較と共通性をみるのに際して、学科・専攻の設立時期と背景の違い、学部の違い、地域、年代の違いなど課題が挙げられる。

先に、橋本典尚（二〇一一）「大学の図書館学課程一九九〇～二〇〇〇」『名古屋大学大学文書資料室紀要一九』などで報告したが、図書館学をみる上でも、旧来からの図書館学と図書館情報学として広がっていた時期を合わせることが条件的に良いと考える。図書館学がパソコン・インターネットなど情報機器の発展によつて変化し始めた一九八〇年代から、省令改正で大幅に内容が変化する一九九六年以前で、学生数が安定した時期をとらえると、第二次ベビーブームで学生数が急激に多くなった一九九〇年代前半が良いと考える。特に、学校案内などにカリキュラムが記載されはじめた一九九〇年代、パンフレットなどでカリキュラム編成の状況がわかる時期、また、学科の構成、慶応義塾大学文学部図書館・情報学科（一九九三）が三つのコースになる直前、愛知淑徳大学文学部図書館情報学科（一九九〇）と、東洋大学社会学部応用社会学部図書館学専攻（一九九〇）が、学生数の拡充、情報化社会にあわせて、カリキュラム改定した時期が、共通性を持つ条件になると考え資料収集と整理から分析を行った。

四年制大学（学部レベル）で三校の専門カリキュラム編成を見る共通性と視点

- 一・情報化社会にあわせて図書館施行規則の省令改正（一九九六）前、図書館情報学カリキュラムの時期、
- 二・情報化社会にあわせて専門科目の新設が行われカリキュラム改定で安定していた時期、
- 三・学生数が多くなった一九九〇年代、学科のコース制などが導入される前の時期、
- 四・学校案内・パンフレット・先行研究などで、カリキュラム編成の状況概略がわかる時期、

四年制大学（学部レベル）で三校の専門カリキュラム編成を見る共通性の条件

大学における司書養成と図書館学としての専門学科について、一九九〇年代、情報化社会の発展と共に、情報機器を利用した技術からの司書課程（図書館情報課程）へのカリキュラム編成の影響は、大きかったと言える。そこで、一九九七年の折に、資料として関係者から頂いていた資料を基に、二〇一一年三月から二〇一一年一二月の期間で各大学の資料で確認できた記録から、一九九〇年代を中心に、「東洋大学・学校案内（一九九二、一九九四）」、「東洋大学短期大学・学校案内（一九九〇、一九九四、一九九九）」、「東洋大学社会学部履修要覧（一九九〇、一九九四）」、「東洋大学短期大学ハンドブック（一九九二、一九九四）」、「慶應義塾大学・学校案内（一九九二）」、「慶應義塾大学文学部図書館・情報学科要覧（一九九二）」、「愛知淑徳大学・大学院履修要覧（一九九〇、一九九二）」、「愛知淑徳大学文学部履修要覧（一九九四）」、「愛知淑徳大学・大学履修要覧（二〇〇七）」、関連する学会の資料「白山情報図書館学会論集（一九七八～一九九九）」、「白山情報図書館学会誌（一九八八～一九九九）」、「Library and information science. 三田図書館・情報学会（一九七六）」、「Journal of library and information science. 愛知淑徳大学図書館情報学会（二〇〇五）」、「同志社大学図書館学年報（一九九三、一九九七～一九九九）」及び、年史・年誌の資料『東洋大学社会学部五〇周年史（二〇〇九）』、『慶應義塾大学文学部図書館・

情報学科五〇年記念誌(二〇〇一)、『愛知淑徳大学二〇年誌(一九九五)』などを対象として、愛知淑徳大学図書館情報学科、慶応義塾大学図書館・情報学科、東洋大学図書館学専攻カリキュラムから概要の考察を試み、現在、橋本典尚(二〇一一)が所有する図書館情報学についての資料を中心に、収集整理から報告を行った。

三 日本国内の大学における図書館学(学科・専攻) ライブラリアンスクール系譜

三・一 戦前戦後の司書養成・講習・図書館学(学科・専攻)の設置と背景

二〇一一年、筑波大学知識情報・図書館学類、かつての図書館情報大学、国立図書館短期大学、帝国図書館付属図書館職員養成所、文部省図書館員教習所が設置されて九〇周年を迎えた。日本国内で唯一、戦前戦後を通じて国によって、専門職の養成が行われた重要な役割を担ってきた機関と言える。だが、戦前・戦後を通じての国家資格、司書養成の位置は、微妙であったと言える。戦前の一時期行われた国の検定試験をはじめ、占領期のアメリカ人が、日本国内に図書館がほとんどないこと知って、各地で驚いた話しからも様子が伺えるように、公立の図書館が少なく、納本制度など整備されていなかった時代、占領期にGHQ(SCAP)、CIEからの調査報告と提言で、図書館法(一九五〇)^①、図書館施行規則(一九五〇)^②が施行され、国家資格としての専門職・司書養成がスタートした。その主な司書養成として行われたのが大学講習である。東洋大学図書館学講習(一九五〇)、鶴見女子短期大学図書館学講習(一九五四)をはじめ、後に、文部省委属の大学講習(司書講習・司書補講習)として、東洋大学(一九五五)、鶴見女子短期大学・現在の鶴見大学(一九五六)、桃山学院大学(一九六〇)、別府大学(一九六一)、

広島文教女子大学（一九七二）などで行われ、各地の大学・短期大学で司書課程の設置が多くなるまでの間、中心的な役割を果たしてきたと言える。ただ、東洋大学（一九七四）のように大学講習を終了して、大学専攻（学部レベル）での専門養成・大学教育に移ったケースもある。専門領域として、短期講習と他学科での資格課程の設置の位置については、現在でも議論は多い。

四年制大学（学部レベル）での教育についての出発点に、戦後、日本国内において、占領期にGHQ（SCAP）、CIEから行われた教育改革で「Robert, B. DOWNS（一九四八）の『ダウンス報告』⁽⁶⁾の提言によって、慶應義塾大学（一九五〇）にはじめて設置された図書館学科が挙げられる。アメリカ人からの支援で設置された慶應義塾大学図書館学科（一九五〇）に対して、その後、日本人だけによって私学で独自に設置した東洋大学社会学部図書館学専攻（一九五九）、国によって設置された国立の図書館短期大学（一九六四）、図書館情報大学（一九七九）が挙げられる。近年では、複合領域から図書館学だけでない鶴見大学文学部ドキュメンテーション学科（二〇〇四）なども挙げられるが、多くの図書館学科が改組となつて、司書養成を主とした四年制大学（学部レベル）では、現在、筑波大学と慶應義塾大学のみとなつている。では、日本国内で、司書養成の軌跡をみると、何がみえるのであろうか。高等教育の軌跡から記録⁽⁷⁾を残す視点として、早い時期に調査再考から記録する必要性は、大きいと言える。日本国内における四年制大学（学部レベル）での図書館情報学（学科・専攻）専門と、主な司書養成と講習の流れを年表にすると、次のようになる。特に、国家資格の司書養成課程からカリキュラム編成をみる上でも、情報化社会が一般化した一九九〇年代が、大学でひとつのターニングポイントになっていることが伺える。

なお、本論でみる図書館情報学（学科・専攻）の私立三校「愛知淑徳大学図書館情報学科」「慶應義塾大学図書館

情報学科」「東洋大学図書館学専攻」と、国立の司書養成機関からの流れを持つ「筑波大学知識情報・図書館学類」については、背景と系譜の概略をまとめておく。

主な日本国内における大学の図書館情報学（学科・専攻）と司書養成・講習の周辺の流れ

一九二一年・文部省図書館員教習所（東京美術学校内）を設置、一九二二年に移管して帝国図書館図書館員教習所に、

一九二五年・文部省図書館講習所と改称

一九四五年・図書館講習所を閉鎖、日本国の敗戦、

連合国軍総司令部GHQ／SCAPによる占領政策（一九四五―五二年）

一九四七年・帝国図書館付属図書館職員養成所として再設置、

一九四七年・日本国憲法の公布、国会図書館法の制定、国立図書館附属図書館職員養成所に改称、

一九四八年・国立国会図書館を設置、

一九四九年・国立図書館廃庁により文部省所管に移管、文部省図書館職員養成所に改称、

一九四九年・文部省図書館職員養成所を設置、

一九五〇年・図書館法の制定、図書館法施行規則の省令、

一九五〇年・東洋大学で文部省認定の図書館学講習を始める、一九五三年からは司書補講習も始める、

一九五一年・図書館法の第六条に規定する司書講習が始まる、

一九五一年・図書館学講習を九州大学・京都大学など旧帝国大学を中心に国立大学で開催（一九五五年頃まで）、

一九五一年・慶應義塾大学文学部図書館学科を設置、

- 一九五四年・鶴見女子短期大学（現在の鶴見大学）で文部省認定の司書講習・司書補講習を始める、
- 一九五五年・東洋大学で文部省委属司書講習を始める、一九五六年から夏期講習（一九七四年まで）、
- 一九五六年・鶴見女子短期大学（現在の鶴見大学）で文部省委属司書講習・司書補講習を始める、
- 一九五九年・東洋大学社会学部応用社会学科（広報学専攻・社会福祉学専攻・図書館学専攻）を設置、
- 一九五九〇年・東洋大学図書館学専攻で科目新設と専門領域科目の必修単位二四↓三四↓三八を上げる、
- 一九六一年・別府大学で文部省委属司書講習を始める、
- 一九六二年・東洋大学応用社会学科に学科専攻「マスコミ学・社会福祉学・図書館学・社会心理学」を設置、
- 一九六四年・（国立）図書館短期大学の設置、図書館科、別科・特別養成課程を設置、
- 一九六五年・（国立）図書館職員養成所の廃止、
- 一九六七年・慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻修士課程を設置、
- 一九六八年・慶應義塾大学図書館学科を図書館・情報学科に改称、
- 一九六八年・慶應義塾大学図書館・情報学科のカリキュラム改訂、
- 一九七一年・（国立）図書館短期大学の学科を図書館学科と文献情報学科に改組、
- 一九七二年・広島文教女子大学で文部省委属司書講習を始める、
- 一九七三年・東洋大学図書館学専攻で専門科目「ドキュメンテーション」の新設、
- 一九七四年・東洋大学図書館学専攻で専門科目「文献解題」の新設、
- 一九七四年・東洋大学で文部省委属司書講習を終了、一九七二年には司書補講習も終了、専門学科教育を中心に、
- 一九七五年・慶應義塾大学文学研究科図書館・情報学専攻博士課程を設置、

- 一九七九年・国立学校設置法の一部改正により、(国立) 図書館情報大学の設置、
- 一九八一年・(国立) 図書館短期大学の閉校、
- 一九八〇～一九八七年・慶應義塾大学文学部図書館・情報学科で専門科目「情報管理」などを新設、
- 一九八五年・愛知淑徳大学文学部図書館情報学科を設置、
- 一九八五～一九八七年・東洋大学社会学部図書館専攻で四年次の実習を外し三年次に必修化、
- 一九八八年・東洋大学社会学部図書館専攻で他学部にかきがけ情報学の専門科目「情報管理」など新設、
- 一九八九年・愛知淑徳大学が共学化、愛知淑徳大学大学院文学研究科図書館情報学専攻修士課程設置、
- 一九九一年・愛知淑徳大学大学院文学研究科図書館情報学専攻博士課程設置、
- 一九九三年・慶應義塾大学図書館・情報学科をニコース(図書館・情報メディア・情報検索)のカリキュラム編成に、
- 一九九〇～一九九五年・東洋大学図書館専攻で学科昇格の準備として専門科目の充実化、ゼミの一つ四年必修化、
- 一九九六～一九九九年・東洋大学図書館専攻で卒業条件「司書資格取得の決まり」を外す、情報技術を充実化、
- 二〇〇〇年・東洋大学社会学部の改組により図書館専攻マスコミ学専攻をメディアコミュニケーション学科に、
- 二〇〇〇年・慶應義塾大学文学部改組により図書館・情報学科を、人文社会学科図書館・情報学専攻に、
- 二〇〇〇年・国立国会図書館国際子ども図書館を設置、
- 二〇〇二年・国立国会図書館関西館を設置、
- 二〇〇二年・(国立) 図書館情報大学が筑波大学に統合、(国立) 筑波大学図書館情報専門学群に、
- 二〇〇四年・国立大学法人法施行により、(国立) 図書館情報大学を閉校、
- 二〇〇七年・(国立) 筑波大学情報学群知識情報・図書館学類に改組設置、

二〇〇八年・愛知淑徳大学大学院文学研究科図書館情報学専攻を改組、文学専攻を設置、

二〇一〇年・愛知淑徳大学図書館情報学学科を改組により、人間情報学部人間情報学学科を設置、

二〇一二年・図書館法（二〇〇八）改正により司書養成の機軸姿勢が大学講習から大学教育（課程）に移行、

日本国内における大学の図書館情報学（学科・専攻）と、司書養成・司書講習の関連年表（二〇一一年作成）

三・二 図書館職員養成所・国立図書館短期大学・図書館情報大学・筑波大学知識情報・図書館学類の概略

日本国内で、初めて公的な司書養成機関^⑤として設置されたのが、一九二一年に、乗杉嘉壽（一九二一）らによって、東京美術学校内に開設した文部省図書館員教習所である。日本的な専門職の養成機関として、戦前・戦後と重要な役割を担ってきた。帝国図書館の付属機関から文部省所管など変遷しつつも、多くの司書を養成した。敗戦後、帝国図書館付属として再設置、その後、アメリカカ国からの支援で慶応義塾大学（一九五二）に図書館学科が設置されると、一九六四年に、国立の図書館短期大学の図書館科（八〇名）、別科・特別養成課程（四〇名）を開校、岡田温（一九六四）が初代学長となった。一九六五年に図書館職員養成所が廃止された後、図書館科の定員が一二〇名に変更され国内で最大規模になる。情報化社会にあわせてドキュメンテーション情報技術の必要性から、一九七一年には、学科の改組により、図書館学科（八〇名）と文献情報学科（四〇名）を設置、その後、四年制大学への要望から、一九七九年、国立学校設置法の改正により、図書館情報大学が「つくば学園都市」に設置、東京都内にあった図書館短期大学は一九八一年に閉校した。その後、二〇〇二年に図書館情報大学は筑波大学に統合、筑波大学図書館情報専門学群（二五〇名）となり、図書館情報大学が閉校、二〇〇七年に、筑波大学情報学群知識情報・図書館学類に改組し設置され、現在に至っている。現在でも四年制大学（学部レベル）、図書館学の名称で、

国家資格の司書養成を行っている二校ひとつであり、図書館情報学の学類では、国内で唯一の大学となっている。

三・三 慶応義塾大学文学部図書館・情報学科の概略

占領期（一九四五―五二）アメリカ合衆国からの教育使節団による提言と支援は、大きかった。特に、連合国軍総司令部民間情報教育局（GHQ/CIE）による「国立国会図書館に於ける図書整理・文献参考サービス並びに全般的組織に関する報告（一九四八）」⁵、いわゆるRobert, B. DOWNS（一九四八）の「ダウンス報告」⁵によって、日本国内に、四年制大学（学部レベル）での新しいJapan Library School「図書館学科」の設置提言から、一九五一年に、日本国内の四年制大学で初めて設置されたのが、慶応義塾大学図書館学科（一九五二）である。その専門職養成の位置と状況について、科学技術庁がまとめた「昭和四七年版科学技術白書（一九七二）」²⁵では、国立の図書館短期大学と比較して図書館学だけでない情報技術からも重要な位置を持っていたと指摘している。設置した当時、アメリカ合衆国からの支援の基、Robert L. GILLER（一九五二）ら訪問教授を中心に、文学部長の橋本孝（一九五二）らと共に、アメリカ人による図書館学の教育活動を行い、一九五六年以降になって日本人による教員陣となり、レファレンス視点からコミュニケーション視点に移行した。定員は設立時の五〇名から二〇〇〇年に改組するまで六〇名に拡充され、卒業生も約二五〇〇名を数え、大学の図書館職、情報学系の職種と共に研究の職種も多い。その後、教員としては、中村初雄（一九七七）、津田良成（一九八〇）、高山正也（一九九七）らによって、図書館情報学だけでないコミュニケーション書誌から情報技術を中心に教育活動が行われた。一九六八年には、図書館・情報学科に改称。その後、一九九三年に、慶応義塾大学図書館・情報学科を三コース（図書館・情報メディア・情報検索）を導入して、三コースのカリキュラム編成に改定、現在の図書館・情報学専攻の形ちの基となっている。

ただ、二〇〇〇年に、慶應義塾大学文学部の改組により、図書館・情報学科も改組、人文社会科学部図書館・情報学専攻を設置して現在に至っている。四年制大学（学部レベル）では、現在でも、図書館情報学の名称で、司書養成の専門教育活動を続けている二校のひとつとなっている。なお、学科・専攻に関連する学会として、三田図書館・情報学会（一九六三）⁽²⁶⁾が挙げられる。

三・四 東洋大学社会学部応用社会学科図書館学専攻の概略

日本国内の大学で、唯一、社会学部に設置した図書館学専攻が東洋大学（一九五九）である。背景については、先に報告しているので、概略に留めるが、社会学部の設立時の構想を推進した米林富男（一九五九）らの案と共に、専攻教員として中心にいた和田吉人（一九五九）⁽²⁷⁾による「図書館も一つの社会的な運動であると理解し、図書館学の基礎は社会学でなければならぬ」との認識が強かった理由から、「社会学部の理念を、扇のカナメ」として「図書館情報学を中心に」社会学部に設置したとされる。その後、武田虎之助（一九六二）、鈴木賢祐（一九六五）、岡田温（一九六九）、石井敦（一九九四）、岩淵泰郎（一九九七）らによって、図書館の現場教育からの支援を中心に、改組するまで、教育活動を行っていた。ただ、学生の規模としては、設置された国立私立の中でも小さく、設立時の東洋大学社会学部応用社会学科三専攻（広報学専攻・社会福祉学専攻・図書館学専攻）五〇名で、図書館学専攻には、第一期生四名⁽²⁸⁾、第二期生三名、第三期生四名と、図書館短期大学の八〇名、慶應義塾大学の五〇名に比較すると小規模なスタートであった。その後、四専攻になった応用社会学科の定員が一九七〇年代に一一〇名、専攻では、平均三五名前後、一九九〇年代の後半には、臨時定員を含めて学科で二〇〇名となり、七〇名（六八名）まで拡充する。図書館学専攻の卒業生は約二〇〇〇人だが、トータルに全体で見ると平均五〇名前後と言え、小規模であつ

たと言える。図書館法施行後に、一五単位以上の認定で講習を行った大学では、東洋大学（一九五〇）が古かったと言える。ただ、一九七四年に、東洋大学で文部省委属司書講習²⁸を終了してから、専攻における専門教育を中心に行い、情報技術にあわせて、「情報管理」など新設、一九九〇年に、図書館学専攻で学科昇格の準備として、ゼミの1〜4年必修化など行いが、一九九六年に卒業条件「司書資格取得の決まり」を外し、二〇〇〇年の東洋大学社会学部改組により、図書館学専攻とマスコミ学専攻を統合したメディアコミュニケーション学科が設置され、現在は、司書養成の専門教育を終了して、専門領域を広げて教育活動をしている。なお、専攻に関連する学会として、白山情報図書館学会（一九八七）²⁹が挙げられる。

三・五 愛知淑徳大学文学部図書館情報学科の概略

図書館情報学科の中では、最も新しく、一九八五年、文学部に設置されたのが、愛知淑徳大学図書館情報学科である。愛知淑徳大学の小林素文（一九八五）、慶応義塾大学からの津田良成（一九八四）、名古屋市立舞鶴図書館からの山本進（一九八四）らが中心になって開設にした。図書館情報学科の定員は一〇〇名、最も拡充した一九九〇年代で一五〇名の時、一学年の在学数一九〇名であったと記録から伺える。設置に関わった人々の様子は、山本進（二〇〇五）「図書館情報学科設立一七年を振り返って」『愛知淑徳大学論集』などで伺え、特に、慶応義塾大学と共に、愛知淑徳大学の図書館学科に関わり、初代学部主任となった津田良成（一九九三）「図書館情報学の展開と構築―二つの大学に関わって―」『同志社図書館学年報一九』²⁴は、貴重な資料と言える。その後、村主朋英（一九九三）、長澤雅男（一九九七）らによって、図書館情報学を中心に、マネージメント、プログラム、情報医療などの教育活動が行われた。現在は、共学になっている愛知淑徳大学だが、当時、中部エリアで女子大の御三家と言われた女子

大学であったと伺い、今では知らないイメージとなっている。だが、日本国内で最後まで残っていた図書館情報学
科も二〇一〇年に改組、医療情報学・心理学を加えた、人間情報学部人間情報学科が設置され、そのひとつを、リ
ソースマネージング系列を図書館情報学系として、専門領域の範囲を広げ、図書館情報学の教育を行っている。な
お、学科に関連する学会として、愛知淑徳大学図書館情報学会（一九八八⁽²⁾）が挙げられる。

四 大学の図書館情報学（学科・専攻）カリキュラム編成

四・一 一九九〇年代の司書課程カリキュラム編成

一九九〇年代、情報化社会の変化よって影響された専門領域のひとつに、図書館情報学が挙げられる。それは、
図書館学の領域が、旧来の手作業による技術から、情報機器を利用した情報技術の発展と共に、範囲を広げつつ変
化、現在の複合領域・図書館情報学につながったと言える。だが、学部学科の改組が進んだ一九九〇～二〇〇〇年
代、国家資格の専門養成でありながら、多角的に改組したケースであるものの、専任司書職の公募は、バブル経済
の崩壊後、ほとんどない。なぜ、大学の専門教育養成が、専門職に結びつかないのだろうか。一九九〇代の同じ時
期、国家資格でありながら「看護師」職は、四年制大学の設置と共に複合細分化、専門領域として重要視されてい
るが、専門職としての位置が未確立である「司書」職の背景には、何が存在するのであろうか。

一九九〇年代の司書課程カリキュラム編成を見る上で、一九九〇～一九九五年と、一九九六～二〇〇〇年の二つ
に区分できる。それは、情報化社会によって「インターネット」「パソコン」情報機器が一般化した一九九〇年代
の改正ほど、大きなものはなかったと言える。特に一九九六年、情報化する直前の社会変化にあわせて大幅な改正

があった記憶は新しく、一九六八年以来の改正であっただけに、影響は大きかったと言える。一九六六時の「文部省令第二七号、平成八年八月二八日付で改正告示」でみると、新設科目として、「図書館経営・レファレンスサービス・情報検索サービス・児童サービスの基礎」が伺える。また、図書館利用と活用から、経営と共に、「生涯学習論」の視点が加わったことも、特色として挙げられる。一方で、情報機器を利用した技術応用と共に、従来からの手書きによる司書技術の科目幅は、減少している。一九九〇年代前半は、新旧の司書技術が共存していた時期であったと言える。それは、情報機器を利用した「情報管理」の新設と共に、図書館学に情報学系が加わって行った図書館情報学のカリキュラム編成にも影響が大きかったことは、否めないだろう。では、一九九〇年代、各大学での図書館情報学（学科・専攻）カリキュラム編成では、どのような傾向があったのだろうか。

四・二 一九九〇年代の大学（学部）における図書館学（学科・専攻）専門領域カリキュラム編成の位置

三つの大学における一九九〇年代の図書館学（学科・専攻）専門領域カリキュラム編成表（比較表）を作成するに際して、先の研究視点で述べたように、一九九〇年代の前半、図書館法施行規則³の省令改正が行われる前の一九九六年以前で、学生数の状況、学科・専攻の規模と状況が類似している時点として、まとめることとした。

なお、本論では、四年制大学（学部レベル）の図書館学の学科・専攻を主としたため、大学院のカリキュラム編成については、扱わなかった。また、国立の筑波大学（図書館情報大学）については、私立を主として、共通にみる条件をそろえたことから、扱わなかった。国立大学、各大学院の教育視点については、次の機会に、報告できたらと思う。

専門カリキュラム編成の記載方法としては、東洋大学社会学部図書館学専攻・愛知淑徳大学文学部図書館情報学

科・慶應義塾大学文学部図書館・情報学科の順とした。愛知淑徳大学を中間の記載とした理由は、「情報データベース」「パソコン」など、情報機器が図書館学で使われはじめていた時期に設置されたこと。また、東洋大学の日本的な影響からの図書館情報学と、慶應義塾大学のアメリカ的な影響からの図書館情報学との位置的な理由から記載順とした。

なお、記載内容については、「学年・必修か選択・科目名（単位数）」で、科目名が異なっても、内容が類似していれば、同じ専門内容として記載、他の大学で開設されていなかった科目については、「東洋大学社会学部図書館学専攻でのみ開設された科目」、「↓」の場合、愛知淑徳大学図書館情報学科でのみ開設された科目、「……↓」の場合、慶應義塾大学文学部図書館・情報学科のみで開設された科目、として記載、表記した。

学年・必修か選択・科目名（単位数）

順番は東洋大学社会学部図書館学専攻―愛知淑徳大学文学部図書館情報学科―慶應義塾大学文学部図書館・情報学科
東洋大学社会学部図書館学専攻でのみ開設された科目、

……↓の場合、愛知淑徳大学図書館情報学科でのみ開設された科目、

……↓↓の場合、慶應義塾大学文学部図書館・情報学科のみで開設された科目、

四年制大学（学部レベル）・図書館情報学（学科・専攻）専門領域カリキュラム編成の記載方法

一九九〇年代（前半）・大学 図書館情報学（学科・専攻）専門領域カリキュラムの比較

―東洋大学社会学部図書館学専攻―愛知淑徳大学文学部図書館情報学科―慶應義塾大学文学部図書館・情報学科―

一年必修・情報図書館学概論(四単位)・一年必修・図書館情報学概論(四単位)・二年必修・図書館・情報学概論(四単位)

一年必修・情報図書館学演習(二単位)・三年必修・図書館情報学演習(二単位)・四年必修・図書館情報学演習(三単位)

一年必修・図書館資料組織論Ⅰ(四単位)・二年選択・資料組織論Ⅰ(二単位)・三〇四年選択・資料組織論Ⅰ(四単位)

二年必修・図書館資料組織論Ⅱ(四単位)・二年選択・資料組織論Ⅱ(二単位)・三〇四年選択・資料組織論Ⅱ(二単位)

……………↓三年選択・資料組織論Ⅲ(二単位)・三〇四年選択・資料組織論Ⅲ(二単位)
……………↓一〇四年選択・資料組織論Ⅳ(二単位)

……………↓※資料組織論三科目六単位以上の要件

二年必修・図書館サービス論(四単位)……………二年必修・情報サービス概論(四単位)
二年必修・レファレンス/情報サービス論(四単位)・三年選択・図書館活動演習(二単位)・三〇四年選択・参考調査法(四単位)

……………↓三年選択・図書館実習(二単位)

三年必修・情報図書館学演習Ⅱ(二単位)……………三〇四年必修・図書館・情報学研究会Ⅰ(二単位)

三年必修・図書館資料論(四単位)……………一年必修・図書館資料組織概説(四単位)・二年必修・資料論概説(四単位)

三年必修・図書館資料論演習(二単位)・一年必修・図書館資料組織概説(四単位)・二年必修・資料組織概説(四単位)

……↓三年選択・図書館学特殊Ⅰ〔分類〕(二単位)
……↓三年選択・図書館学特殊Ⅱ〔目録〕(二単位)
……↓三年選択・図書館学特殊Ⅲ〔演習〕(二単位)
四年必修・情報図書館学演習Ⅲ(四単位)・三年必修・図書館情報学演習Ⅲ(四単位)・三〇四年必修・図書館・情報学研究會Ⅱ(二単位)

……↓四年必修・図書館情報学演習Ⅳ(四単位)
三〇四年必修・情報図書館学実習Ⅰ(二単位)・三年必修・図書館情報学実習(二単位)・三年必修・図書館・情報学実習(二単位)

三〇四年必修・情報図書館学実習Ⅱ(二単位)

※必修科目三八単位

※必修科目二〇単位

一〇四年選択・情報メディア論(四単位)・二年必修・情報メディア概論(四単位)
……↓三年必修・情報学総合講座(二単位)
……↓二年選択・情報メディア論Ⅰ(二単位)
……↓二年選択・情報メディア論Ⅱ(二単位)
……↓二年選択・情報メディア論Ⅲ(二単位)
……↓二年選択・情報メディア論Ⅳ(四単位)
……↓情報メディア論三科目六単位以上の要件
一〇四年選択・情報検索論(四単位)……二年必修・情報検索概論(四単位)……三〇四年選択・情報検索論(四単位)

一〇 四年選択・情報検索実習 (二単位)・三年選択・情報検索法Ⅰ (二単位)・三〇 四年選択・オンライン検索法 (二単位)

……………↓三年選択・情報検索法Ⅰ (二単位)

……………↓三年選択・情報検索法Ⅰ (二単位)

……………※情報検索法三科目六単位以上の要件

……………↓四年選択・図書館情報学特殊「社会」A (二単位)・二年選択・図書館情報学特殊 (二単位)

一〇 四年選択・日本図書館史 (四単位) ………………三〇 四年選択・図書・図書館史 (二単位)

一〇 四年選択・欧米図書館史 (四単位) 四年選択・図書館情報学特殊「歴史」B (二単位) 三年選択・図書館情報学特殊 (二単位)

学特殊 (二単位)

一〇 四年選択・出版・読者論 (四単位)

……………↓四年選択・図書館情報学特殊「データベース作成」H (二単位)

……………↓四年選択・図書館情報学特殊「建築」F (二単位)

一〇 四年選択・情報図書館特講「学校図書館・児童サービス論」Ⅰ (四単位)

一〇 四年選択・情報図書館特講「美術・ドキュメンテーション」Ⅱ (四単位) ………………三〇 四年選択・書誌学Ⅰ (二単位)

……………↓三〇 四年選択・蔵書構築論 (二単位)

……………↓四年選択・図書館情報学特殊「文献」G (二単位) ………………二〇 四年選択・図書館情報学特殊 (二単位)

……………↓四年選択・図書館情報学特殊「分析」C (二単位)

……………↓四年選択・図書館情報学特殊「ビジネス」D (二単位)

……………↓四年選択・図書館情報学特殊「書誌」E（二単位）……………三〇四年選択・書誌学Ⅱ（二単位）
……………↓※図書館情報学特殊二科目四単位以上の要件

一〇四年選択・情報処理基礎実習（二単位）……………一年必修・プログラミング言語Ⅰ（四単位）

……………↓二年必修・プログラミング言語Ⅱ（四単位）

……………↓三〇四年選択・プログラミング言語Ⅲ（二単位）

……………↓三〇四年選択・プログラミング言語Ⅳ（二単位）

一〇四年選択・情報活用論および実習（四単位）

……………↓三年選択・情報処理技術Ⅰ（二単位）・三年必修・情報処理技術概説（四単位）

……………↓三年選択・情報処理技術Ⅱ（二単位）

……………↓三年選択・情報処理技術Ⅲ（二単位）

……………↓三年選択・情報処理技術Ⅳ（四単位）

……………↓※プログラミング情報処理三科目六単位以上の要件

一〇四年選択・情報図書館システム論（四単位）・二年選択・情報システム管理概論（二単位）・二年必修・情報シ

ステム概論（四単位）

……………↓三年選択・情報システム管理Ⅰ（二単位）・三〇四年選択・情報システム管理Ⅰ（二単位）

……………↓三年選択・情報システム管理Ⅱ（二単位）・三〇四年選択・情報システム管理Ⅱ（四単位）

……………↓三年選択・情報システム管理Ⅲ（二単位）・三〇四年選択・情報システム管理Ⅲ（四単位）

……………↓三〇四年選択・情報システム管理Ⅳ（二単位）

※選択科目内で六科目以上を選択する条件

……………↓三〇四年選択・情報システム管理Ⅴ(二単位)

……………↓一年必修・情報処理概説(二単位)

……………↓二年必修・プログラミング論(二単位)

……………↓三年選択・ソフトウェア論(二単位)

……………↓三〇四年選択・データ管理論Ⅱ(二単位)

……………↓三〇四年選択・データ管理論Ⅱ(二単位)

四年選択・卒業論文(八単位)・四年必修・図書館情報学演習〔卒業論〕(八単位)・四年必修・卒業試験〔卒業論文〕(八単位)

※専門領域群で三六単位……………

※専門領域で二八単位以上

一年必修・社会学概論(四単位)……………三年選択・社会教育概論(二単位)

……………↓四年選択・教育原理(二単位)

二年必修・社会調査(四単位)……………一年必修・調査研究法Ⅰ(二単位)

……………↓二年必修・調査研究法Ⅱ(二単位)

三年必修・社会調査および実習(四単位)・

※共通科目選択必修八単位……………

※共通領域で二四単位以上

一〇二年指定選択・情報管理論(四単位)・三年選択・情報学Ⅰ(二単位)……………三〇四年選択・情報学Ⅰ(二単位)

一〇二年選択・情報行動論(四単位)……………三年選択・情報学Ⅱ(二単位)……………三〇四年選択・情報学Ⅱ(二単位)

一〇二年選択・情報環境論(四単位) ……三年選択・情報学Ⅲ(二単位) ……三〇四年選択・情報学Ⅲ(二単位)

……………三年選択・情報学Ⅳ(二単位)

……………三年選択・情報学Ⅴ(二単位)

……………※情報学三科目六単位以上の要件

……………二年選択・外国語文献研究Ⅰ(二単位)

……………二年選択・外国語文献研究Ⅱ(二単位)

……………二年選択・外国語文献研究Ⅲ(二単位)

……………※外国語文献研究一科目選択指導

一〇四年選択・社会心理学概論(四単位)

一〇四年選択・マスコミュニケーション(四単位)

※選択必修科目三科目以上

※選択必修科目で八単位以上

大学 図書館情報学(学科・専攻)の専門領域群一九九〇年代前半のカリキュラム編成(二〇一一年作成)

三つの四年制大学(学部レベル)における図書館情報学(学科・専攻)カリキュラム編成から共通性を比較してみると、全体的に設置科目数と単位数の違いが目につく。全体を通しての基本となる設置科目の違いはないものの、内容、学期制、学部、学生数の違いがある。特に、東洋大学が通常の四単位を主としていたのに対して、慶応義塾大学と愛知淑徳大学では、二単位を主として科目を設置、同一名称の科目内でも、内容も色々に広がった様子が見える。現在、セメスター制や三学期制を取っている大学が多くある中、二単位の半期科目は、区分から学生にとつ

ては、テーマからわかりやすく、範囲を広げる視点からも、対応が早かったと言える。

ただ、慶応義塾大学図書館・情報学科も東洋大学社会学部図書館学専攻も、司書課程のカリキュラム編成を主にして、図書館学の専門領域から情報学系の科目を新設していった方法では、同じであった様子と言える。

東洋大学図書館学専攻の場合、岩淵泰郎（一九九〇）によれば、現場出身の教員が多かったこともあって、省令で規程されている科目と共に、司書技術とされる目録・分類・整理技術・参考を中心とした司書養成の科目を構成、カリキュラム編成改定の折は、専攻主任を中心に教員全体で検討を行い情報学系の科目を新設していったと伺う。東洋大学図書館学専攻が社会学部に設置していた利点から、「幅広く知識を知る機会」があったとも言えるが、専門領域との関係で、図書館の技術を主とし過ぎていたとも感じる。ただ、一九六〇～一九九〇年代、「図書館学の東洋大学」と言われた時期があったことから、東洋大学（図書館学専攻）出身者の司書の特徴として、「資料の整理技術」「地域と連携した社会活動」などで、公共・大学図書館で好評であった記録が伺える。

それに対して、慶応義塾大学図書館・情報学科の場合、「レファレンス技術」、「ドキュメンテーション書誌技術」、「科学情報技術」で、大学・専門図書館で好評があり、出身者に教育研究者が多く出たことから、研究領域に向いていた様子が伺える。慶応義塾大学図書館・情報学科（一九五一）の場合、津田良成（一九九三）、高山正也（一九九九）によれば、学科の教員全体でカリキュラム編成を検討する傾向が強く、基礎となる初期のアメリカ人の教員による視点に、「レファレンス技術」を主としたカリキュラム編成があり、その後、日本人のみの教員になって、「ドキュメンテーション（書誌）」を主としたカリキュラムの方向性になったと指摘している。

さて、愛知淑徳大学（一九八五）を通して見た場合、情報化社会より前に設立された東洋大学（一九五九）、慶應義塾大学（一九五一）と、情報化社会の直前に設立された愛知淑徳大学（一九八五）との違いで、「情報処理技術」

でない「プログラム作成技術」視点の違いが伺える。それは、一九八〇年代から情報学部・工学部などで行われたいた「コンピューター・サイエンティストの養成」との境界、専門領域の重なりが微妙であった様子とも言える。

愛知淑徳大学図書館情報学科（一九八五）の場合、慶応義塾大学図書館・情報学科でのカリキュラム編成を参考に、「知識情報を学べるパソコンを利用した技術」と「マネージメント」を加えたカリキュラム編成を設立時に主とした経緯があり、出身者の方向性も様々であったことから伺える。最も新しかった愛知淑徳大学図書館情報学科（一九八五）の設置時「理念」と「方向性」には、図書館学だけでないコンピューターからの知識と情報技術の視点があつたとされる。津田良成（一九九三）⁽²⁾によれば、中京エリア（名古屋地区）では図書館（司書）職としての就職先が限られることから、一般企業の情報部門への就職先として、図書館学だけでなく、「情報MINDを持つた知識情報学を学びコンピュータの情報への利用に関する知識と技術で武装した「テクノ・レディ」の養成を目的とした」と伺う。最先端であつたスキルについて、私自身、一九九四年前後の短大生の折、就職活動すると、必ず、「ワープロは、使えますか」「パソコンは、使ったことありますか」と聞かれた記憶がある。現在では、一般化したパソコンスキルからイメージしにくい「テクノ・レディ」だが、最先端の情報技術を導入していた視点では、大学教育において「必要となる社会スキルを求められる現在」の先を行っていた動きと言える。そのため、愛知淑徳大学（図書館情報学科）出身者の司書の特徴として、出身者に教育研究者が出ていと共に、大学・学校の司書職だけでなく、企業の情報技術専門職として、好評であつた記録が伺える。

一般的に、担当する教員にとつて狭い範囲の領域を担当したいと求める傾向が強い。一方で、先を見た複合的な領域が学生にとつては、社会スキルから必要となつてくる。幅広くカリキュラム編成の計画作成にあたっては、時間が取られる理由がここに伺え、学科の設立以降に、専門領域を広げることの難しさが挙げられる。

四・三 一九九〇年代の大学における図書館学(学科・専攻)専門領域カリキュラム名称の差異と共通性

図書館学から図書館情報学に広がった領域の背景には、一九九〇年代の情報機器技術の一般化があったと言える。愛知淑徳大学では、一九九〇年代、カリキュラム編成の専門領域を「図書館情報学領域」「情報理論領域」「情報工学領域」に区分している。情報工学にあたるプログラミングなどを外せば、旧来から扱う図書館学領域であり、情報機器によって方法が一般化するまでの経過で、司書スキルとの共通性を探していた時期であったと言える。

図書館学の基本となる専門領域は、科目名の名称に違いがあっても、内容にあまり差異は、見られなかったと言える。詳細に扱う内容の時間差が大きかった点と、教員によって異なる「演習」内容から、各大学における独自の専門カリキュラム編成の視点が伺える。内容に差がなかった名称から取りあげてみると、表記の順を、「東洋大学図書館学専攻・愛知淑徳大学図書館情報学科・慶應義塾大学図書館・情報学科」として、例えば、「情報処理基礎実習とプログラミング言語……」、ほとんど変わらない名称で例えば、「情報図書館学概論と図書館情報学概論と図書館・情報学概論」、「情報図書館学演習と図書館情報学演習と図書館情報学演習」、目録・分類の「図書館資料組織論・資料組織論・資料組織論」、演習研究指導の「情報図書館学演習Ⅲ・図書館情報学演習Ⅲ・図書館・情報学研究会」が挙げられる。特に、「研究会」名称を使用する慶應義塾大学は、独特と言える。

学科の名称、科目の名称で、なぜ、慶應義塾大学では、「図書館・情報学科」なのだろうか。津田良成(一九九三)らによると、慶應義塾大学では、文学部に設置されていたことから、情報学を加え拡充しようとした時、当初、「情報図書館学」として申請したが、理解が得られなく、図書館学と情報学をあわせた視点として、中点で区切る「図書館・情報学」になったと指摘している。一方、愛知淑徳大学で「図書館情報学科」が設置された一九八五年の時点では、図書館学の領域が情報学に広がっていることも理解されていたと伺う。現在、共通の名称として専門領域

になっっていることから、時代の変化が伺える視点とも言える。東洋大学では、「図書館学専攻」のまま二〇〇〇年の改組まで続いたが、科目の名称は、社会学部に設置されていたことから、岩淵泰郎（一九九〇）らによると、情報学系を加えた科目の名称変更にも申請で「情報図書館学」の理解が得られたと伺っている。後に、東洋大学図書館学専攻でも、科目名称が「情報図書館学」から「図書館情報学」に改定しているが、二〇〇〇年代に、各大学での司書課程で「図書館情報学」となった背景について、「日本図書館学会」が一九九八年に「図書館情報学会」⁽³³⁾に変更して、図書館情報学の基軸にした影響と言える。

二〇一二年から施行する本改正された省令⁽³⁴⁾では、一四科目の基本領域を、それぞれ二単位にすることが求めている。専門領域を、「図書館情報学の基礎科目（領域）」、「図書館経営に関する科目（領域）」、「図書館資料に関する科目（領域）」、「図書館サービスに関する科目（領域）」、「図書館特論「実習」（領域）」系に分類、各区分ごとに講義と演習を設定、図書館情報学が扱う専門領域からの基礎スキルは、広がっているとも言える。

本論では、四年制大学（学部レベル）での図書館情報学（学科・専攻）から、一九九〇年代のカリキュラム編成をみてきた。結果、国家資格でありながら、専門領域が変化した一九九〇年代、旧来の司書スキルと新しいスキルとが加わる中で、急速な変化に対応しようとしていた様子が伺えたと言える。特に、複合化する新領域に対して、枠から越える悩みを持つていた視点は、現在に続く課題であると言える。ただ、資格課程が設置されている一部の文学系で専門講義で時折、図書館情報学の内容より、古典文学の演習的内容が行われていた話を伺う。時折、レファレンスのツール方法・目録・分類の意味が、わからない図書館職員を見ることがからも、資料の収集整理利用に記録する専門の役割姿勢について、再認識する時期にきているのではと思ってしまう。資格取得の後、現場の職員として教育を受ける機会があれば良いとする見方もあるが、果たして、大学教育を機軸として行く時に、良いのだ

ろうか。研究教育に関わる側の一人として、カリキュラム編成の視点に不安を感じる。

現在、「私にとって、魅力ある図書館の資料は」あるのだろうか。複合領域から記録と情報を見る時、図書館学が持っていた理念「動く有機体」から、記録と保存と利用視点の再考が求められているのではないだろうか。

なお、同じ一九九〇年代、国家資格でありながら、四年制大学の設置が多かった看護養成の専門課程についても、カリキュラム編成と教育視点、資料整理と記録は、看護保健学に関わった一人として必要性を感じている。

五 むすびに

二〇一一年四月、九州大学の大学院に、総合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻が設置された。これを記念に二〇一〇年二月一八日に「設置記念シンポジウム」が開催されたが、その中で、開設の目的「理念」として、旧来の図書館情報学・記録管理学などで、「利用者の視点に立っていないなかった視点を再構築」を、アーカイブズ学（公文書館・記録管理）として「ユーザー視点に立った情報の管理と提供を確保」するために、理論や技能などを教育する目的視点を挙げている。私自身、この視点については、先に報告した橋本典尚（二〇〇二）「ネサヨ運動」とその周辺⁵⁵の調査報告から「一九六〇年代に全国展開した教育活動「ネサヨ運動」、九州で地域展開した「ネハイ運動」でさえ、公立・大学・学校の図書館に「教育活動の資料」が残存しない現状は、広い視点で二次資料の構築を行なつてなかつた司書の専門視点がかけていた結果であったと感じている。また、大学・短期大学の専門養成する視点で、古典資料を中心とする文学系が主と成りすぎていた視点も、今後の課題であると感じる。それは、看護保健学系に教育から関わった一人として、「求める資料の時期」と「質」について、文学系の視点とは、求め

る位置の差が大きいからと言える。特に、看護学・保健学・医学では、時系列からも、「新しい情報に対応するスキル」、「位相差に対応するスキル」が、求められている視点の違ひから思うからである。

インターネットなど情報化しつつあった一九九〇年代、大学の図書館学カリキュラム編成は、どこにみてもであろう。それは、一九九〇年代前期には、司書技術に情報技術を加えた方向性であったと言える。だが、一九九〇年代後期に、急激なパソコンなど情報機器の一般化は、司書スキルも変化をさせ、図書館学に求めた応用性を変化させたと言える。ただ、情報効率化などの視点から、図書館で共通する資料を保存しない傾向、インターネットの情報に頼る傾向の視点は、複合化から専門性を色あせた専門領域の全で、今後とも課題になるだろう。

では、本来の司書として、図書館情報学とは、なんであろう。加藤好郎（二〇〇一）³⁶は、「司書という職業とは、司書という資格でなく、学術情報を扱う専門職である」と意識が必要であると指摘している。「学術情報を扱う専門」情報について、堀込静香（一九九一）³⁷は、図書館情報学の記録保存と書誌の重要性から、情報化社会におけるドキュメンテーション書誌技術の必要性を指摘している。では、「ドキュメンテーション」の役割とは、何であろうか。図書館情報学の司書スキルとして、長澤雅男（一九八七）³⁸は、「レファレンスの基礎は書誌作成にある」と指摘している。インターネットなど情報化した現在の社会において、情報収集を行う書誌研究が必要なのか疑問も多い。しかし、インターネットやデータベースにある情報が全てと思われる危険性があるのも事実である。そういった意味からも、失われた情報資料を調査、記録作成を行う必要性は、アーカイブズの記録として、後々の記録遺産として研究面でも大きいと言える。二〇〇〇年代、大学において、図書館情報学の学科が改組、消えつつあったが、結果的に、「記録情報の収集と整理管理から、利用できるようにする視点」を、現在の社会から再度、専門職として、求められ認識する時期にきているのではと感ずる。では、本来の図書館学とは、何であろうか。高

山正也(一九九九)³⁷は、図書館学教育の現状と課題について、「図書館情報学の研究内容」と「図書館情報学の大学での扱われ方(設置している位置と学科での立場)」を挙げている。専門が理解されにくい位置から、一九八〇〜一九九〇年のアメリカ国内と同様に、日本国内においても「職業的ハツ・ツ」を主とした軌跡から、本来の社会的な研究方法と情報技術的な研究との総合化が機能しなくなっていた経過があると指摘している。だが、果たして、専門的なハツ・ツ一だけなのだろうか。藤野幸雄(一九九八)³⁹は、司書の専門性と図書館の機能を、「1・情報の収集、2・情報の整理、3・情報の保存、4・情報の利用」と区分している。特に、「3・情報の保存」では、「資料は利用されるためにある」「いくつかの図書館で所蔵して世の中に複数あるもの」、「4・情報の利用」では、「利用があつてこそその意義」がある図書館学を、「利用者側からの資料構築」視点の重要性を、指摘している。すなわち、利用度で判断するのではなく、記録資料を利用できるようにする視点である。それは、時系列だけでなく、世代間から横断的にみる利用視点からも、司書スキルを求めている。また、司書の役割として、「1・求める資料が存在するのか(存在情報)」、「2・それは、どこに存在するのか(所在情報)」、「3・どうしたら使えるのか(利用情報)」は、常に発信された資料すべてに関わることであり、幅広く見る視点で、図書館情報学から専門領域に求められる位置と指摘している。

それは戦後、日本国内で求められ図書館学にあった、民主主義の基礎として、人々が自由な意志により判断を行う際、基礎をなす「情報から判断」「個人で良いと思う判断」を行うために、気軽に多くの情報を入手・整理・加工・判断できる位置として図書館情報学・司書の専門と社会的役割からも、忘れてはならないだろう。

最後に、二〇一一年三月一日に発生したM9東日本大震災(二〇一一・東北関東大震災)は、10meの津波、福島県での原子力災害など、六ヶ月経っても見えない状況が続いている。広範囲な震災となった中、東北大学災害

科学国際研究所設置（二〇一二）計画など、いくつか、震災時の資料を収集する動きもあるが、公的に大学を中心としての話は聞こえてこない。阪神・淡路大震災（一九九五）の際には、震災直後から、神戸大学付属図書館で資料の収集保存整理が行われ、現在、「震災文庫」⁴⁰として、知られている。早急な震災からの復旧を願いつつも、図書館情報学系の関係機関で、「3・11大震災」資料の収集保存整理、そして、利用できる記録「アーカイブズ」としての視点が始まることを期待している。

本論では、ライブラリアンスクールの系譜と共に、四年制大学（学部レベル）で設置されていた図書館情報学（学・専攻）のカリキュラム編成から一九九〇年代を中心にしたため、専門性が伺える「大学院」カリキュラム編成、また、担当により方向性と内容に差がでる「演習」「特講」について考察を行わなかった。だが、三つの大学にみるカリキュラム編成の軌跡は、専門領域からの共通性と、それぞれ領域が複合化する中で求めた方向性であったと言える。今後とも、専門領域に係る資料「学会」「ゼミ論集」などからも調査と資料整理を行い、高等教育からの記録の軌跡²⁴再考調査として、これからの幅広い教育の領域に、活用できたらと考えている。

謝辞・本稿にあたって資料調査等に、ご協力頂きました、飯島みゆき・石井純子・岩淵泰郎（二〇〇四年逝去）・大島一郎（二〇一一年逝去）・岡田昭彦・小山郁子（一九九九年逝去）・園田恭一（二〇一〇年逝去）・高木美加・福島わかば・堀込静香（二〇〇三年逝去）・松井通生・松下咲子・水江朱里・山内裕子ほか、関係者みなさまに、報告と感謝を申しあげます。（敬称省略）

注記

- (1) 文部科学省 図書館法 (一九五〇)
 - ・ http://www.next.go.jp/a_menu/shougai/gakugei/shisyo/04040503.htm (二〇一〇～)
- (2) 文部科学省 改正司書養成科目に関する Q & A (二〇一〇)
 - ・ http://www.next.go.jp/a_menu/shougai/gakugei/shisyo/1283540.htm (二〇一〇～)
- (3) 文部科学省 図書館法施行規則 (一九五〇)
 - ・ http://www.next.go.jp/a_menu/shougai/gakugei/shisyo/04040504.htm (二〇一〇～)
- (4) 文部科学省 司書講習相当科目の単位認定大学一覧 (二〇一〇)
 - ・ http://www.next.go.jp/a_menu/shougai/gakugei/shisyo/ (二〇〇九～)
- (5) 連合国軍総司令部民間情報教育局編 (一九四八) 『国立国会図書館に於ける図書整理・文献参考サービス並びに全般的組織に関する報告(ロバート・ビー・ダウンス報告・国立国会図書館の日本語翻訳版)』
- (6) 筑波大学情報学群知識情報・図書館学類 (二〇〇七)・<http://klis.tsukuba.ac.jp/> (二〇一〇～)
- (7) 図書館情報大学・筑波大学 (二〇〇〇) 大学間統合にむけて・<http://www.uils.ac.jp/kouho/> (二〇〇〇～二〇〇七)
- (8) 慶應義塾大学文学部人文社会学科図書館・情報学系図書館・情報学専攻 (二〇〇〇)・<http://www.fel.keio.ac.jp/sils/overview/> (二〇〇一～)
- (9) 東洋大学社会学部五〇周年記念委員会 (二〇〇九)・<http://www.soc.toyo.ac.jp/anniversary/> (二〇〇九～)
- (10) 愛知淑徳大学二〇〇九学部再編について (二〇〇九)・<http://www.aasa.ac.jp/reorganize/> (二〇〇九～)
- (11) 橋本典尚 (二〇一〇) 『大学の図書館情報課程一九九〇―二〇〇〇ケース：東洋大学図書館学専攻と東洋大学短期大学の周辺からみて』『名古屋大学大学文書資料室紀要』一九 p27-58
- (12) 文部科学省これからの図書館の在り方検討協力者会議 (二〇〇八) 『二〇〇八年一〇月一七日に第二回行われた配布資料・二・』

- 図書館に関する科目（改正図書館法第五条第一項第一号）の基本的な考え方」に理由が報告されている。
- (13) 文部省（一九六七）『司書講習等の改善に関するについて報告書』岡田温らによって提言された。国家検定については、武田元次郎（一九九七）「日本の司書検定試験規定について」、『夏会報』四七、pp.2-3、などを参照。
- (14) 川戶理恵子（二〇〇九）「短期大学における省令科目の開講」『図書館雑誌』一〇三（四）、日本図書館協会、pp.233-225
- (15) 岩淵泰郎（二〇〇二）『応用社会科学図書館学専攻の歴史』、『白山図書館学研究』緑蔭書房、pp.115-132、岩淵泰郎（一九九〇）『東洋大学図書館学専攻の最新カリキュラムと今後の課題』、『白山情報図書館学誌』二、pp.1-8、などで伺える。
- (16) 慶應義塾大学図書館・情報学科開設五〇年記念行事実行委員会（二〇〇二）『慶應義塾大学文学部図書館・情報学科五〇年記念誌』慶應義塾大学文学部図書館・情報学専攻、などで伺える。
- (17) 高山正也（一九九五）「慶應義塾大学文学部図書館・情報学科にみる図書館学教育の変遷と展望」『図書館雑誌』八九（六）、日本図書館協会、pp.26-43、高山正也（一九九九）「図書館学史の発展の中にみる慶應義塾と同志社」『同志社図書館学年報』二五、pp.4-33、などで伺える。
- (18) 慶應義塾大学図書館・情報学科カリキュラム委員会（一九七三）「慶應義塾大学図書館・情報学科のカリキュラムの現状」『Library and information science』11、pp.1-62、三田図書館・情報学会編（一九七六）「慶應大学文学部図書館・情報学科創立二五周年記念特集号」『Library and information science』14、pp.1-388、などで伺える。
- (19) 愛知淑徳大学（一九九五）『愛知淑徳大学二〇年誌一九九五』愛知淑徳学園、を参照。
- (20) 山本進（二〇〇五）『図書館情報学科設立一七周年を振り返って』『愛知淑徳大学論集』三〇、pp.51-59
- (21) 津田良成（一九九三）『図書館情報学の展開と構築』『同志社図書館学年報』一九、pp.2-38、などで伺える。
- (22) 日本図書館情報学会研究委員会（一九九八）『図書館学研究とその支援体制』日本図書館情報学会
- (23) 筑波大学図書館情報メディア研究科九〇周年記念展示「知識情報とメディアの世界」（二〇一一）・二〇一一年一〇月三日〜一〇月一〇日（筑波大学春日エリア情報メディアユニオン棟会場）

- (24) 高等教育の記録・軌跡については、名古屋大学「名古屋大学図書資料室」はじめ、現在、国立大学の公文書機関を中心に全国各地で、資料の収集、保存、整理、公開が始まっている。
- (25) 図書館情報学橋会(二〇一一) 図書館員養成所・国立図書館短期大学・図書館情報大学時代からの同窓会、資料として、「母校の沿革」などで軌跡が伺える。・<http://www.tachihana-kai.com/about/> (二〇〇五)
- (25) 科学技術庁(一九七二)「第二部科学技術活動の動向 第二章一国内の動向(三) 科学技術情報流通に関する人材養成の現状」『昭和四十七年版科学技術白書』文部省
- (26) 三田図書館・情報学会は、一九六三年に同窓会を基礎に学会として設立。現在は、学科・専攻の研究面での基礎となつて全国規模の学会に発展、卒業生を中心に会員数八〇〇人前後。・<http://www.msils.jp> (二〇一一)
- (27) 和田吉人教授古稀記念祝賀会(一九八六)『和田吉人図書館学・その理論と実践』早川図書
- (28) 渡辺文仁(一九九九)「図書館学専攻課程創設のころ」『白山情報図書館学会誌』一、pp.12-16、などを参照。
- (29) 和田吉人(一九七五)「東洋大学司書司書補講習の概要」『東洋大学図書館学講座』東洋大学、pp.8-19。
- (30) 白山情報図書館学会は、一九八七年に設立。東洋大学の卒業生を中心に活動を行い、会員数一〇〇人前後。
- (31) 橋本典尚(二〇一一)の報告で設置年代を一九九〇年頃としていたが、正確には、一九八五年の女子大学時代の設置である。一般的に知られはじめたのは、第一期卒業生が出てからの一九九〇年代になってからである。
- (32) 愛知淑徳大学図書館情報学会は、一九八八年に設立。図書館情報学科の学会として活動。・[http://www2.aasa.ac.jp/faculty/DLIS/jis/ \(110105\)](http://www2.aasa.ac.jp/faculty/DLIS/jis/ (110105))
- (33) 図書館情報学会(一九九八)「学会の名称変更記念シンポジウム」『研究大会発表要綱一九九八』四六、pp.111-117
- (34) 九州大学大学院総合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻(二〇一一)・<http://www.ils.kyushu-u.ac.jp> (二〇一一)
- (35) 一九六〇年代、全国展開した教育活動(運動)にも関わらず、図書館などに資料がほとんど残存していない現状を、橋本典尚(二〇〇二)「『ネサヨ運動』とその周辺」『社会言語学会予稿集』九、pp.15-20、で報告している。
- (36) 加藤好郎(二〇〇一)「二世紀の大学のライブラリーとは」『一夏会報』五一、鶴見大学、pp.32-41、を参照。

- (37) 堀込静香 (一九九二) 「書誌を使って、書誌を知る」『短期大学図書館研究』一、pp65-71、を参照。
- (38) 長澤雅男 (一九八七) 「レファレンスガイドの形成と課題」『書誌索引展望』一、一四、pp1-19、を参照。
- (39) 鶴見大学図書館学講座 (一九九八) 「特別講演「図書館員とはいかなる人種か」、そして藤野幸雄先生のこと」『一夏会報』四八、鶴見大学、pp90-95、を参照。
- (40) 神戸大学付属図書館「震災文庫」(一九九五) 一九九五年一月二七日に発生した阪神・淡路大震災時の様々な身近な資料を収集記録、一九九五年一〇月から公開をはじめ二〇一一年現在では、四八〇〇〇点の資料を保存公開している。
・ <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqlb/> (二〇〇二)

参考文献

- 愛知淑徳大学 (一九九五) 『愛知淑徳大学二〇年誌一九九五』愛知淑徳学園
- 石井敦先生古稀記念論集委員会 (一九九五) 『転換期における図書館の課題と歴史』緑蔭書房
- 岩猿敏生 (一九九七) 「図書館員養成教育と図書館学教育」『同志社図書館情報学』二、三、別冊八、pp1-22
- 岩淵泰郎 (一九九〇) 「東洋大学図書館学専攻の新カリキュラムと今後の課題」『白山情報図書館学誌』一、pp1-8
- 岩淵泰郎 (一九九九) 「和田吉人先生と図書館学専攻」『東洋大学社会学部四〇周年記念論集』pp161-167
- 岩淵泰郎 (二〇〇二) 「応用社会学科図書館学専攻の歴史」『白山図書館学研究』緑蔭書房、pp115-132
- 岩淵泰郎教授古稀記念論集刊行委員会 (二〇〇二) 『白山図書館学研究』緑蔭書房
- 岡田靖 (二〇一一) 「省令改正にもなう司書講習における対応」『図書館雑誌』一〇五(五)、日本図書館協会、pp278-279
- 加藤修子 (一九九〇) 「図書館・情報学教育における主題専門教育」『図書館学会年報』三七-三、pp125-138
- 加藤好郎 (二〇〇一) 「二世紀の大学のライブラリアンとは」『一夏会報』五一、鶴見大学、pp32-41
- 川戸理恵子 (二〇〇九) 「短期大学における省令科目の開講」『図書館雑誌』一〇三(四)、日本図書館協会、pp223-225

- 九州大学大学院(二〇一一)『ライブラリーを科学する―九州大学大学院総合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻設置記念シンポジウム報告書―九州大学大学院総合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻設置準備委員会、pp.1-45
- 慶応義塾大学図書館・情報学科カリキュラム委員会(一九七三)『慶応義塾大学図書館・情報学科のカリキュラムの現状』『Library and information science』11『三田図書館・情報学会、pp.1-62
- 慶應義塾大学図書館・情報学科開設五〇年記念行事実行委員会(二〇〇一)『慶應義塾大学文学部図書館・情報学科五〇年記念誌』慶應義塾大学文学部図書館・情報学専攻
- 慶応義塾大学三田情報センター(一九七二)『慶応義塾図書館史』慶応義塾大学
- 柴田正美(二〇〇九)『省令科目をふりかえる』『図書館雑誌』1〇三(四)、日本図書館協会、pp.216-219
- 高山正也(一九九五)『慶応義塾大学文学部図書館・情報学科にみる図書館学教育の変遷と展望』『図書館雑誌』八九(六)、日本図書館協会、pp.426-431
- 高山正也(一九九九)『図書館学史の発展の中にもみる慶応義塾と同志社』『同志社図書館学年報』二五、pp.4-33
- 津田良成(一九九三)『図書館情報学の展開と構築―二つの大学に因って―』『同志社図書館学年報』一九、pp.2-38
- 東洋大学(一九八七)『社会学部応用社会学科』『東洋大学百年史・部局史編』、pp.344-354
- 東洋大学社会学部五〇周年記念委員会(二〇〇九)『東洋大学社会学部五〇年史』東洋大学社会学部
- 東洋大学図書館学専攻同窓会(二〇〇二)『会報でたどる同窓会の歩み』『白山図書館学研究』、pp.187-210
- 東洋大学図書館学講座(一九七五)『東洋大学図書館学講座史』東洋大学社会学部図書館学専攻
- 永井英治(二〇〇七)『学会アーカイブズという課題』『名古屋大学文学書資料室紀要』15、pp.45-69・<http://hdl.handle.net/2237/9490>(110077)
- 日本図書館情報学会研究委員会(一九九八)『図書館学研究とその支援体制』、日本図書館情報学会
- 橋本孝(一九六三)『図書館・情報学科創立二〇周年記念特集号発刊に際して』『Library and information science』11『三田図書館・情報学会』pp.1-11

- 橋本典尚 (二〇〇二) 「学校図書館の周辺と現状」『白山図書館学研究』緑蔭書房、pp101-112
- 橋本典尚 (二〇〇二) 「現代の若者にみるコミュニケーション行動」『東洋大学大学院紀要』三八、pp350-338
- 橋本典尚 (二〇〇三) 「ネサヨ運動とその周辺」『東洋大学大学院紀要』二九、pp250-238
- 橋本典尚 (二〇〇四) 「ネサヨ運動とネハイ運動」『東洋大学大学院紀要』四〇、pp250-237
- 橋本典尚 (二〇〇五) 「「つやがた」の教育活動と臨床視点」『東洋大学大学院紀要』四一、pp297-312
- 橋本典尚 (二〇〇七) 「いよばからのコミュニケーション活動と教育視点」『東洋大学大学院紀要』四三、pp246-262
- 橋本典尚 (二〇〇八) 「児童の教育活動からみる「ネサヨ運動」と「ネハイ運動」の実態」『国立青少年教育振興機構研究紀要』八、pp177-185・[http://www.nive.go.jp/report/pdf/kiv0815\(1008\).](http://www.nive.go.jp/report/pdf/kiv0815(1008).)
- 橋本典尚 (二〇一〇) 「白山情報図書館学会の軌跡(一九八七～二〇一〇)」と東洋大学社会学部図書館学専攻と東洋大学短期大学」『短期大学図書館研究』三〇、私立短期大学図書館協議会、pp33-42
- 橋本典尚 (二〇一〇) 「白山情報図書館学会の軌跡からみる研究視点(一九八七～二〇一〇)」『白山社会学会第二八回研究大会』(二〇一〇年七月三〇日・口頭発表・東洋大学会場)
- 橋本典尚 (二〇一〇) 「夏のネサヨ祭り(北海道)」と「冬のネサヨ祭り(鎌倉)」『国語論集』八、北海道教育大学釧路校・国語論集編集委員会、pp331-341
- 橋本典尚 (二〇一〇) 「青年期の会話にみる友人関係との言語表出」『青森明の星短期大学付属教育カウンセリング研究所(研究論集)』一、pp2-12
- 橋本典尚 (二〇一〇) 「大学の図書館情報課程一九九〇～二〇〇〇ケース」東洋大学図書館学専攻と東洋大学短期大学の周辺からみて」『名古屋大学文書資料室紀要』一九、pp27-58・<http://hdl.handle.net/2237/15135> (二〇一〇)
- 橋本典尚・福島わかば・松下咲子 (二〇一〇) 「情報書誌研究のバイオニア図書館学」堀込静香(一九四三～二〇〇三)のドキュメンテーション軌跡二〇〇九」『短期大学図書館研究』三〇、私立短期大学図書館協議会、pp43-51

- 藤野幸雄 (一九九八) 「本とは何か」 『知の銀河系・第一集 本と情報の世界』 図書館情報大学開学二〇周年記念事業委員会、pp7-43
- 堀田慎一郎 (二〇〇六) 「大学アーカイブズと『大学資料』(刊行物資料)」 『名古屋大学文書資料室紀要』 一四、pp1-39・<http://hdl.handle.net/2237/9484> (二〇〇六)
- 堀田慎一郎 (二〇〇七) 「大学アーカイブズにおける個人・団体文書(一)」 『名古屋大学文書資料室紀要』 一五、pp1-44・<http://hdl.handle.net/2237/9489> (二〇〇七)
- 堀込静香 (一九九二) 「書誌を使って、書誌を知る」 『短期大学図書館研究』 一一、私立短期大学図書館協議会、pp65-71
- 堀込静香 (一九九五) 「司書講習と特別講習・図書館学の鶴見といわれるようになって」 『図書館雑誌』 八九-六、pp434-435
- 山本進 (二〇〇五) 「図書館情報学科設立一七周年を振り返って」 『愛知淑徳大学論集—文学部・文学研究科篇—』 三〇、pp51-59
- 渡邊由紀子・富浦洋一・吉田素文・岡崎敦 (二〇一一) 「九州大学大学院「ライブラリーサイエンス専攻」の構想と意義」 『情報管理』 五四 (一)、pp53-62

キーワード・教育視点・カリキュラム編成・資料調査・司書養成・アーカイブズ

・資料二〇一一年一二月現在

(はしもと・のりなお)